【学力向上フロンティアスクール用中間報告書様式】（中学校用）

都道府県名	長崎県

Ⅰ　学校の概要（平成１５年４月現在）

学校名	佐世保市立日野中学校					
学　年	１　年	２　年	３　年	特殊学級	計	教員数
学級数	５	５	５	０	１５	３０
生徒数	１９７	１８９	１７２	０	５５８	

Ⅱ　研究の概要

１．研究主題

生きる力を育み、生徒の夢が広がる学校づくり
～　学習指導における指導法の工夫と実践を通して　～

２．研究内容と方法

（１）実施学年・教科

原則として、**全学年・全教科**　対象

特に、以下の学年・教科は、指導改善研究班のメンバーとして、活動の中核となり、実践研究に励んでいる。

○ ***３年生・社　会***

ＴＴ加配があり、習熟度を加味した少人数授業を実践しているため。

○ ***３年生・音　楽***

大規模な研究大会の開催に伴い、当該教科に関する研究実績があるため。

○ ***２年生・選択数学***

ＴＴ加配がないので、選択教科を活用し、きめ細かな少人数授業を実践しているため。

（２）年次ごとの計画

〈平成１５年度〉

○　**研究テーマ**

生きる力を育み、生徒の夢が広がる学校づくり
～　学習指導における指導法の工夫と実践を通して　～

○　**テーマ設定の趣旨**

学習指導要領では、教育内容の厳選により、基礎・基本を確実に定着させることが求められている。

本校は、本年度から２年間「学力向上フロンティア事業」研究の文科省・県教委の指定を受けた。「基礎・基本を、どうとらえるか？」「確かな学力を、どうとらえるか？」など、根本的な所から全職員で「共通理解」を図り、「共通実践」へとつなげていくように本研究を進めていきたい。

生徒は、全体的に明るく素直であり、あいさつや礼儀作法などの基本的な生活習慣が身についている。これは、開校２年間の生徒指導に重きを置いた研修の成果と言える。そこで、今年度は、生徒指導に加え、学習指導に重きを置いた研修に努めたい。

生徒一人一人の実態に応じ、きめ細かな学習指導の充実を図るという視点から、発展的な学習や補充的な学習のための教材開発や個に応じた指導のための指導法の工夫・改善を進め、学力向上のための特色ある学校づくりを推進すべく本テーマを設定した。

○　**研究の見通し（仮説）**

各教科で、個に応じた指導のための評価計画のもとに、少人数授業や習熟度別指導など、個に応じたきめ細かな指導を行えば、基礎・基本や自ら学ぶ力が身に付くだろう。

また、選択教科でも補充的な学習など、多様なコースを開設すれば、よりいっそう個の能力を伸ばすことができるだろう。

○　**研究の内容・方法**

＊学力向上フロンティア事業指定研究校の取り組み

①発展的な学習や補充的な学習など、個に応じた指導のための教材開発

②個に応じた指導のための指導方法・指導体制の工夫・改善

③生徒の学力の評価を生かした指導の改善

＊本校の取り組み

今年度は、**「個に応じた指導のための指導方法・指導体制の工夫・改善」**を中心に研究を推進する。

教科・選択教科で、生徒の実態把握に基づいた基礎・基本を明確化する。

↓

そのために仕組んだ手立て（指導方法や指導体制）の有効性を検証する。

（生徒一人一人の小刻みな学力の変容を数値等でデータとして表す）

基礎・基本の定着と、確実に学力向上に至る研究を推進する。

〈平成１６年度〉

○　**研究テーマ**

生きる力を育み、生徒の夢が広がる学校づくり

～　学習指導における指導法の工夫と実践を通して　～

○　**研究の見通し（仮説）**

各教科で、個に応じた指導のための評価計画のもとに、少人数授業や習熟度別指導など、個に応じたきめ細かな指導を行えば、基礎・基本や自ら学ぶ力が身に付くだろう。

また、選択教科でも補充的な学習など、多様なコースを開設すれば、よりいっそう個の能力を伸ばすことができるだろう。

○　**研究の内容・方法**

＊本校の取り組み

次年度は、**「個に応じた指導のための指導方法・指導体制の工夫・改善」**を中心に研究を継続する。特に**「指導体制の工夫・改善」**に力を入れ、「学力充実の時間」を創設するなど、学習指導を重視した教育課程の編成にも踏み込み、実践研究に努める。

また、評価活動の研究にも踏み込み、「指導と評価の一体化」に向け、系統的な研究成果を構築する。

教科・選択教科で、生徒の実態把握に基づいた基礎・基本を明確化する。

↓

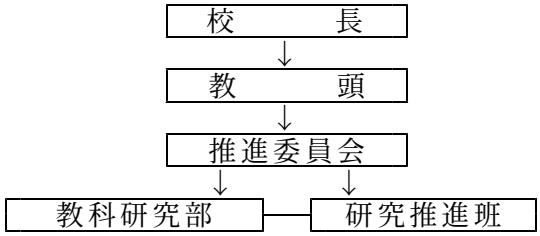
そのために仕組んだ手立て（指導方法や指導体制）の有効性を検証する。

（生徒一人一人の小刻みな学力の変容を数値等でデータとして表す）

評価活動の研究にも着手し、より確実に学力向上に至る研究を推進する。

（３）研究推進体制

〈組織図〉



１．推進委員会

「学校長、教頭、教務主任、研究主任、研究推進班長（６名）で組織する。」

研究推進のための企画・立案、運営上の諸問題の協議および全職員への連絡調整をする。また、全体会にかける原案の作成に関わる援助も行う。

２．実務研究グループ

教科研究群　＋　研究推進班　　“教科研究と研究推進の融合”

①教科研究部

・***（人文科学）***教科研究部‥‥国語・社会・英語の教科担当者
・***（自然科学）***教科研究部‥‥数学・理科・技家の教科担当者
・***（創造表現）***教科研究部‥‥音楽・美術・保体の教科担当者

３グループに統合し、全職員いずれかの教科研究群に所属する。
研究主題の具現化に向けての研究授業と授業研究会を開き、実践研究･検証と理論化を図り、授業改善を推進する。***「大教科部会」と称する。***
（該当する大教科部会所属の研究授業は、原則として、参観する。）

各教科研究部も存続し、***「小教科部会」と称する。***
小教科部会では、次年度に向けて、年間カリキュラムや評価規準・基準表の見直し作業も兼ねる。

②研究推進班

〈指導改善班〉　大教科部会より１教科ずつ選出し、その教科研究部メンバーが、その任務に当たる。（社会・数学・音楽の教科担当者）
「出口イメージ」の具現化に努める。

（１）　発展的学習や補充的学習等、個に応じた指導のための教材開発
（２）　***個に応じた指導のための指導方法・指導体制の工夫改善***
（３）　生徒の学力の評価を生かした指導の改善

＝　本研究の中心となる班　＝

〈基礎学力班〉　国語と英語の教科担当者が、その任務に当たる。
読み・書き・計算を中心とする基礎学力の向上のための具体策の研究を行う。

（活動例）
・　読書指導の推進
・　繰り返し学習（読み・書き・計算）の実施、事後アンケート実施／考察

＝　本研究の中心となる班　＝

以下は、研究を側面から支える班である。

〈教　務　班〉　次年度に向けて、日課表や年間時間割等の効果的な運用についての研究を行う。

（活動例）
・　次年度（研究を重視した）教育課程の提言
・　研究先進校の視察・報告　　主に職員への啓発活動を行う。

〈環境整備班〉　生徒の学習習慣・環境づくりに携わり、かつ、職員研修の機運を醸成するような研究も行う。

（活動例）
・　学習の手引き〈授業の受け方、学習日誌など〉作成
・　（職員室）研修コーナーの設置・管理

〈調査統計班〉　生徒の実態把握に関わるアンケート調査を実施し、分析する。
データ収集と分析が主な役割である。

（活動例）
・　学力調査（ＣＲＴ）の実施
・　学習意識調査の作成・実施／考察

〈情報発信班〉　研究を普及するためのＷＥＢページ作成を担当する。

（活動例）
・　ＷＥＢページ作成・管理
・　研究授業の記録（ビデオ・デジカメ撮影）〔データベース管理〕

＊　次年度は、評価に関する研究班を新設する予定である。

Ⅲ　平成１５年度の研究の成果及び今後の課題

１．研究の成果

〈指導改善班の実践例から〉

指導改善班とは？

本研究の中心となる班で、「出口イメージ」の具現化に努めるものである。今年度は、個に応じた指導のための指導方法・指導体制の工夫・改善についてのみに焦点化し、研究を進める。

大教科部会より１教科選出し、その担当者が任務に当たる。社会科・数学科・音楽科の担当者が、そのメンバーとなり、指導方法や指導形態についての実践研究を行う。同一教科内でＴＴ授業が組めない場合、選択教科を活用するなど、その活動方針は、各教科に委ねられている。

例　３年生・社会（少人数授業の実践例）

① <u>少人数授業を採用した理由</u>

社会科に限らず、すべての教科で誰もが「分かりたい」「できるようになりたい」と願っている。やればできることや分かる喜びを味わわせるなど、「楽しい」と思う体験を通して生徒一人一人に意欲を持たせい。そのために、生徒を見守り、分かり方を気づかせ、必要なときに手助けできる最良の環境をつくる必要がある。そこで習熟度を加味した少人数授業を３年生で完全実施に至った。

② <u>習熟度を加味することへの考え方</u>

少人数指導のねらいは、「学び方を学ばせる」ことである。「学習の仕方」を身につけさせることが「生きる力」を身につけることにもつながると考え、大いに挑戦したいと考えている。さらに、生徒の興味・関心を喚起するために、習熟度を加味した（不完全ではあるが、）習熟度別指導にも踏み込みたい。

○　生徒自身による理解度診断学習である。
　〈生徒作の小テストの実施〉
○　自らつまずきを発見し、自己解決させる学習である。
　〈ワークシートによる課題解決学習の実施〉
○　つまずきの自己解決を通して、学習の仕方を身につけさせる学習である。
　〈基礎問題・発展問題などのコース別家庭学習の実施〉

③ <u>習熟度を導入する上での配慮すべき点</u>

習熟度別とは、テスト結果を基に能力別にグループ編成を行うというイメージがある。しかし、できる生徒、できない生徒という見方で生徒を見るのでは本末転倒である。あくまでも生徒自身が自己解決するための学習であり、それを支援する指導であるというように正しく理解されるように、以下の点を配慮したい。

○　各コース（じっくり・発展）は、生徒自身に判断・決定させる。
　ただし、ねらいの理解が不十分と思われる生徒には、あらゆる機会を通して、説明し、理解を促す。
○　発展型プリントも全生徒に配布する。
○　差別意識を生まない集団をつくる。
○　学習相談できる場を設定する。インターナショナルルームを活用したい。

１．コース分けで学習して

<u>良かった</u>

・人数が減り、よく教えてくれるから。発表や質問がしやすいから。
・自分のレベルにあっていて分かりやすいから。
・環境がよいから。静かであり、落ち着く。集中できる。
・騒がしい人たちが別コースに行ったから。
・今までになく、目新しいから。
・「発展コースには負けないぞ」という力がわくから。やる気がわく。
・発展的なことに興味がわいたから。詳しい所まで追究できる。
・分かるまで教えてくれるから。ゆっくりのペースにしてくれる。

〈じっくりコース〉

<u>普　　通</u>

・分からないことは、やっぱり分からないから。
・今までと授業内容は、特に変わらないから。
・上のレベルについていけなかったから。
・テスト範囲がずれることが度々で不安だったから。

・テストで点数がとれないから。
・テスト点数は、ふつうだつたから。
・発展コースと期待したが、すごく難しいことをしなかったから。
・発展コースは、難しすぎて分からなかったことが多かった。

悪かった　・コースにより、女子が少なすぎたから。
・（出題者の先生によって）テスト内容が違うから。
・結局、勉強しなかったから。
・騒がしい人たちがいて、そのコースを選んだことを後悔したから。
・発展コースは、応用問題が多く、ついていけなかったから。

２．コース分けで学習して

実力がついた　・質問に対して、じっくりと考えることができるから。
・小テスト点数がよいから。
・発表する機会が増えたから。自信がついた。
・パソコンを活用した授業で興味がもてたから。
・疑問が解けると嬉しい気分になる。進んで授業に参加しているから。
・期末テスト点数がよかったから。
・多くのプリント（家庭学習）を出され、力を付けたと思うから。
・プリント（家庭学習）がいっぱいあり、嫌でも鍛えられたから。
・発展した勉強もできたから。
・勉強が楽しくなり、とにかく勉強（復習）した。
・よく振り返りテストがあり、実力が付いたと思うから。

変わらない　・２年生の時と、あまり授業自体が変わっていないから。
・言葉の意味が分かったときは、嬉しかったが、・・・・。
・自分自身、復習をしていないから。テスト点数が変わらない。
・努力が足りない。
・授業でやることは、「じっくり」も「発展」も変わらないから。
・実力がついたか否か分からない。成績が上がったり下がったりである。
・発展コースで学んだが、成績は、発展しなかったから。

実力が落ちた　・コース分けをしても、結局、定期テストで点数がとれない。
・覚えることが苦手で、少しでもペースが早くなると、覚えられないから。
・発展コースにいたが、発展しすぎていて、戸惑うことが多かったから。

④　**成果と課題**

ア．成　果

○　**完全少人数授業の実施**

従来のＴＴ授業よりも効果的である。分かっていて退屈な生徒、分からなくて退屈な生徒の有効な解決策である。１学級の人数が少ないので、特に表現力がつけやすいと実感した。確実な学習効果を得た。また、生活指導面でも行き届くようになった。

○　**教師の指導力向上**

互いに教え方を知る必要があり、そのことが指導方法の改善につながると考える。

教師の指導力向上の意識は高まる。教員間の連絡が密になり、自然と教科部会が開かれる現象が伺えた。

イ．課　題

○　**教材の工夫と開発**

本研究は、「確かな」学力向上を目指している。生徒一人一人の学びに応じて確実な理解を図るために、各コース独自の新たな教材が必要になってくる。きめ細かく対応できるような教材を作成するとともに、学習内容と結びつける具体的な教材・教具を準備する必要がある。その成果は、次年度の課題である。

○　（指導に生かしていくための）**情報交換の時間的な不足**

生徒一人一人の学びに応じた「習熟度別少人数授業」となるためには、指導内容などに関する情報交換を充実したものにしていく必要がある。生徒の学びの様子を

情報交換したり、指導のねらいや内容、学習の進度などを確認したい。事実、内容の取り扱いなどで教師間で細かい食い違いが生じたことからも時間不足が否めなかった。各コースでの教材の工夫についても打ち合わせて指導に生かしていくことが大切である。

さらに、自分の分担外で学習している生徒の様子を担当者から聞き、その生徒に励ましの声かけをすることも実践過程で重要であることに気づいた。次年度の課題である。

○　**評価の調整の必要性**

複数で評価するために、「関心・意欲・態度」の評価の調整が必要である。（ほかの３つの観点は、定期テストなどの客観的な評価を重視している。）

同一テストの実施で基礎・基本を押さえている。ただ、各コース独自の指導をしてもテストに出せない欠点も浮き彫りとなった。

⑤　**習熟度別少人数授業の是非**

ＣＲＴテストなどの学力調査を実施して「学力が、どう変容したのか？」明確にする必要がある。ＣＲＴテストに限らず、現状把握のために、多くのデータを得る必要がある。次年度は、ネーミングの問題など、習熟度の上下関係をつくらない工夫にも配慮し、より強固な基盤を固めたい。

２．今後の課題

○　***研究主題や研究構造図の分析***

現状では、研究主題や研究構造図の分析（言葉の解釈）が行われていない。抽象的な言葉のとらえ方は、人それぞれである。抽象的な言葉を、より具体化して分かりやすい言葉が表現し、研究の方向性を同一歩調で進むものとしたい。

次年度に向けて、「学力」などの根本的な語句にもメスを入れ、確固とした基本方針（本校独自の「看板」）を掲げたい。

○　***指導形態の工夫***

個に応じた指導のための指導体制の工夫は、一部の教科でＴＴ授業や少人数授業として実践されている。ＴＴ授業や少人数授業の実践は、成果が期待できると先進研究校の実践例からも伺える。反面、教師間の打ち合わせの時間確保が難しいなどの懸案も多い。一斉授業の中での習熟度別学習〈コース別学習〉を模索している（本校の）現状に満足せず、多岐にわたる指導形態の工夫に踏み込みたい。教科部会での検討を要する。

○　***評価活動の研究***

現状では、評価に関する研究に踏み込んでいない。教科間で評価のとらえ方について、一貫性・共通性を持たせることは、研究を継続する上での絶対条件である。絶対評価の確立など、評価に関しての説明責任が全うできるぐらいのゴールを目指した活動としたい。「指導と評価の一体化」に向けた取り組みを実践し、成果をあげたい。

日常の（生徒の）自己評価にも客観性を持たせるための研修を積み重ね、自己評価が授業の一部として確実に位置づけられるように働きかけたい。生徒の「確かな」学力向上を目指すために、自己評価を授業に生かす手立てと方法を開発する必要がある。

○　***データの蓄積***

学習実態調査など、複数の回数をとったアンケートは、皆無に等しい。現状把握にも至っていない。豊富なデータは、成果項目の信頼性を増す。定期的・継続的なデータの蓄積と分析をしっかりと行い、生徒の変容を確実なものとしたい。実態把握から指導方法や指導体制の改善につなげることが研究の本来の流れである。次年度こそ、数値的にデータを多く記載し、客観性を増した報告としたい。

○　***保護者への啓発***

現在、「学習の手引き」を作成し、学習習慣の確立に向けて同一歩調で取り組んでいる。分かる授業づくりだけでは、学力の定着に至らない。家庭学習の習慣化が図られてこそだが、家庭の協力なしでは実現できない。学力向上フロンティアスクールとして宣言した今こそ、あらゆる機会を捉えて、保護者への学力向上に向けての啓発を行っていきたい。

また、保護者に向けて「生徒の学力に関する保護者の願い」を調査し、学校をめぐる地域や家庭の実態を知り、学校教育に対する理解と裁量を求めていきたい。

Ⅳ　学力把握のための学校としての取り組み

○　***学習アンケートの実施***

年３回、学期ごとに１回、アンケート調査を行い、分析・考察する。

学習意欲や学習習慣について、「確かな」学力向上に至る検証手段として、生徒の変容を見るために、年に複数の回数実施している。

一つ一つの質問が学習面の何をとらえようとしているのか？　を明確にするために質問の意図を明記した教師用プリントも作成した。

○　***学習個人日誌の活用***　　（学習ノート「心のスイッチ」の記入）

毎日（月～金）朝の短学活、帰りの短学活時に記入し、学級担任も定期的に確認している。

当初の目的は、学習用具の忘れ物を防止するなどの学習規律の確立に主眼をおいていたが、家庭学習時間の把握ができることから、学習習慣の定着化を図る媒介として活用されている。

Ⅴ　フロンティアスクールとしての研究成果の普及

○　平成１６年１月２８日（月）　　「学力向上フロンティア事業」中間発表会　開催

○　１月末を目処に、学校ホームページ開設
【学力向上フロンティア事業関連ページを挿入する。】

◇　次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。（複数チェック可）

【新規校・継続校】　■１５年度からの新規校　□１４年度からの継続校

【学校規模】　□３学級以下　□４～６学級
□７～９学級　□１０～１２学級
■１３～１５学級　□１６学級以上

【指導体制】　■少人数指導　■Ｔ．Ｔによる指導
□その他

【研究教科】　■国語　■社会　■数学　■理科
■外国語　■音楽　■美術　■技術・家庭
■保健体育　□その他

【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】■　有　□　無